彫刻

2025年　第88回新制作展
「作家のひとりごと」
（会員有志　＋　入選作家）

会員のひとりごと(順不同)

阿部誠一
私は人体の形・ポーズで心を表そうとしてきました。初入選は「強制」、両手を引っ張られている姿。2回目の新作家賞は「否」と「屈」。仮装の人たちは現状不満の抵抗、それが圧力で屈服。人の歴史です。買って陳列する美術館は無いようです。今、革命を経験した超大国が、ミサイルを撃ち込み人を殺している。降参するまでか。今年も「ウクライナ」シリーズ、四作目の超大国の人殺しをやめて欲しい願いからです。

雨宮　透　　春夏秋冬　／　夏の日・2025
「自然から目と心を逸らしてはいけない」を原点に制作してきた私ですが、何処までやれているか自問自答するこの頃です。最も身近な「自然」である「自分」に向き合うたことが無かったという思いから、今回取り組んだのが「夏の日・2025」である。これまで感じたことがない発見があり、新鮮で爽やかな心を得ることが出来た。もう一点の女性の頭像、「春夏秋冬」と合わせてご覧頂き、私の想いに触れて頂けたら嬉しいです。

大西康彦　　墨人・幸三
題名は創る前から「墨人・幸三」と決めていた。昨年は「困魚洞主人」どちらも英語にはない言葉で翻訳には難儀した。英文学を専門にする友人を煩わした困魚洞の訳は編集段階でkongyodouに変わっていた。今年の墨人をどう訳そうか・・・、bokujinで行こうと決めたが念のためにチャット何たらに尋ねてみた。AIは幾つかの訳例案の最後に『〈Bokujin(墨人)
The one who expresses the soul through ink〉として”墨を通して魂を表現する者”の副題を添えれば英語圏の人にタイトルの意味を探らせる印象深いものになるでしょう。』と結んだ。僕はこのChat GPTの答えに痺れてしまった。

小柳力　　霊境の森シリーズ 「地吹雪」
今回の作品は、乾漆像です。世界自然遺産の白神山地は、毎年今までに無いスピードで変化しています。 橋は流され，崖は崩れ、元の遊歩道に戻るには、何十億円かかるか分からないと言うことです。この状況を「地吹雪」という題材で制作してみました。 立つことも、前に進むことも、呼吸することの困難になるくらい、厳しい環境になることです。
一枚の毛布でプラスの空間とマイナスの空間で構成し、立体の人物に構成してみました。

杉本準一郎　　五月雨の降り残してや光堂
芭蕉さんの”奥の細道”より彫刻を作っています。当時の”光堂”の前に立ち、どんな感慨を持ったのかと思うと急に親近感を持つのです。不思議なことです。時を超え、時代を語る要因が大変化する中、静かに立ち止まるのです。

杉本準一郎　　蚤風馬の尿する枕元
”蚤虱・・・”この主題にはたいそう驚きました。表現する行為はとてつもないことなのですね。わたしたち彫刻家は重大な役割と課題と使命を求められていると感じました。

菱田波
支えられながらも少しずつ目標に向かって進んでいく様子を表現しました。同じ石から2つの形を作っています。それぞれ表情は違いますが個々の魅力を持ちます。石は硬質な素材ですが力強い素材です。日々対話しながら制作しています。

酒井良　　石・二つ
久々に体調を気にしないで手彫りが出来るようになったが、なぜか初めて石をたたいたときのように毎日手をたたく。
今まで出来ていたことが出来なくなり、いつの間にか又出来るようになり、体調という者は面白いものだ。
目の前にある全てのものに心が動く。

久保制一　　garden ―この星で生まれて―
この星で生まれたぼくらはこの星のためになにをなしえるのか。この星の輝きの幾千万もの光の束のその中の一筋と光となり平和で明るい世界を照らすことができるのか。光とその影とで織りなす時空を超えたフォルムを探しクリエイトすることでその答えとしたいと願っている。

本田悦久

2024年アーチゾン美術館でブランクー視点が開催された。学生の頃から憧れていたブランクーシの大きな展覧会は初めてだと思う。「眠れるミューズ」が原形ではない石膏作品としてみられるというので早速友人と行った。完璧なまでに洗練されたフォルムのブロンズから石膏に置き換えられたもので、中心に石膏のバリが残りブランクーシが伝えたかったことが凝縮されているように思えた。

長谷川喜男　「森の鼓動」

森の樹木は、大地から芽を出し共生しながら天空へと伸びようとしている。その姿は森が鼓動しているようだ。この鼓動は人間が互いに鼓動しながら生きている姿につながる。鼓動するいのちのかたちを黒御影石に表現しました。

長谷川喜男　「春の鼓動」

春になると植物は萌芽や芽吹きが始まり、静かに鼓動をしている。人もワクワクドキドキの季節となり心身共に鼓動する。心といのちが鼓動するかたちとして、人間の生命感を黒御影石に吹き込みました。

瀬辺佳子　アジール

夢見ていたアジールはもはや崩壊寸前となり、荒れ果てたその庭には、物言えぬ果実がぶら下がっている。

牧野未央　アガリコー桜

これまでアガリコ(男性像)を制作してきたが、昨年からはっきりと「2体組」という意識が強くなった。陰と陽は常に共存し、流動と回転を繰り返す。本作は右と左で僅かに陰陽の流れを生むように作った。もともと左像はコロナ禍に制作。以来、日の目を見る事なく佇んでいた彼だったが、いずれは本展に立つ思いで常にアトリエに居た。2025年4月、満開の桜の頃、私のデッサンに初めて本物の桜が咲いた。文字というのは物を示す記号ではない。そのモノ全てを封じ込めた魔法だと知る。初めて文字を書けた喜びに、桜！桜！と画面に在る人体デッサンもろとも巻き込んで字を書いた。
今年のアガリコは桜の吹き荒れる空気を作る。

稲角新平　「cyber punk α」(サイバー パンク アルファ)

高度に発展したコンピューターやネットワークで管理された社会。人間が快適で豊かな生活をしている一方で、共存共栄できずに暴走を始めた人工知能(AI)が社会を支配する未来像。暴力的で退廃した近未来やデジタル社会に警鐘を鳴らす。

稲角新平　「cyber punk β」(サイバー パンク ベータ)

土台となる形の上に巻かれていくワイヤーによって徐々にその姿を現す。まるで、3Dプリンターのようなこの技法は私独自のものだ。さらに様々な種類のワイヤーを使い分けることで、近未来をイメージした新しい人体表現となった。

稲角新平　「cyber punk γ」(サイバー パンク ガンマ)

ワイヤーが積層されて現れたその姿は、近未来を予知するかのような感情をもった人工知能をモデルとした人体。マスクにオーブン粘土、肩から背中にかけてチューブを素材として用いた。さらにボディーを半具象にすることで、人工的ではあるが人間に近い(または超える)存在に感じさせようと試みた。

小柳順　「イミテーションの上」

ストリートダンスを踊る姿のリズム感や躍動感に感動して作品にしたいと思い制作しました。早いリズムで繰り返される動きや重力を感じさせないような動きが表現できればと思っています。欅(ケヤキ)の木を使っていますが粘り強い材料なので不安定な形でも強度がある素材です。

飯田昌史　蟹枕(かにまくら)

蟹枕(かにまくら)は私の勝手な造語。嬉しいことと悲しいこと、幸と不幸、どちらも思いがけずやってきて簡単に入れ替わる。あるいは表裏一体に存在している。まるで蟹を枕に寝入るかのように。心地よいものと気色悪いものの共存こそが、厳しく危うい現実の姿だ。単純には割り切れない怪しい魅力があり、案外悪くないと思うこともある。自分の過去を振り返り、今から思えばよくあんな危なっかしいことをやったもんだと思うことも多くなった。
自分勝手な理屈遊びに苦笑い。でもそれを具体的な形に表現できたときは何とも言えずうれしい。

人見崇子　Free way

極み立つ猛暑の中、作品の構成を考えてました。頭の中は、しがらみばかりですが、制作場にある木材たちには、自由に動いてもらいたいと願いました。毎朝の雑草とりに、気付きがありました。雑草だらけの場所をキレイにする時は、背高から抜き、次に横に横柄なヤツを抜くと、だいぶ風通しが良くなります。時間がある時は、更に便乗している草をカマで根絶やしにする。毎朝の変化は制作と似てたのしかな~ひとり雑草論~私の作品は植物からイメージを受けています。
10月20日より、いりや画廊にて個展もあります。ご高覧いただければ嬉しい限りです。

江村忠彦　　庭

私の友人がニワの研究によって博士論文を書いた。ニワとは、庭園を指すのではなく、神事・行事などの行われる場所のことだという。日常の中で自然と皆がそこに集まり、いつしか円環を形成しているときがある。生き生きとざわめく姿を漆に託し、賑わいを生み出してみたいと思う。

松枝源太郎　　共鳴Ⅰ、Ⅱ

自分の中にはいつも意識下でくすぶっている考えや想いがあるのかもしれない。誰かを作ろうとする時、そのくすぶっていたものが共鳴するように表出することがある。それは少しずつ音を大きくしながら形になっていく。私にとって、人を作るということは、意識下の自分を解放することなのかもしれない。

岡孝博　　RAIL WORKS Ⅸ

RAIL WORK の制作を始めて約10年経った。その間、RAILを通じて様々な経験をさせて頂き現在の自分がある。運が良いことに、2023年に故郷広島の公立美術館で個展を開催できた。今年は個展以降に制作した作品を発表できた。制作を続けていると何かしら面白いことが起こると感じている。作品を見て頂いたかたにも幸運が訪れることを願っている。

河合睦子　　穀雨

二十四節気の穀雨は穀物の成長を助ける雨のことをさします。障害のある子供たちと接する機会を持つことが出来ました。自分の思いを伝えられない子供たちに穀雨の1滴が染み込んでゆけばと思っています。

渡辺尋志　　想い(desire)

「祈り」、「願い」ではなく「想い」というタイトルになりました。手を合わせることは宗教や悼みなど、個人の心の中に仕舞い込んだものに感じられますが、もっと強い欲求を表すには「想い」なのか？とこのタイトルにしました。戦争はいらない！！！

松本弘司　　『ゆく川の流れは…』

方丈記の無常感が、せまってくる。地球環境や人間の起こす争いを思うと、時の移ろう中で待つだけでは他の生命を道連れにして、大地は人間に破壊されてしまう。摂理の限度を超え、我々は増えすぎた。自分に出来ることは何かと、考え、問い、創りつづける。それがなにか未来に繋がるかもしれない。

高家　理　「あったかい手」

今回の出品作は、小野崎美紀さん著「あったかい手」という詩集に想を得て制作しました。詩集は2011年の東日本大震災の際、石巻市の海辺の避難所となったお寺での日々から生まれた、珠玉の心情の綴りです。優しい気持ちを分け合った尊さを、忘れないよう祈念します。

笠井利彦

1枚の紙に鉛筆で或いはペンで素早く線を引く…気楽に気持ちよく引く線は人体の形を伴いイメージする作品のエスキースとして展開する。 私の線は紙の上で空間になり微妙な動きは心地よい量として展開する。 私は素描、ドローイングが好きです。彫刻制作に於いて粘土や石膏直付けで制作することが多い…しかし　素描のように　実空間に線を引き立体を制作出来ないか？この夢は繰り返し私をおそう…　今回使いなれた技法を離れ空間に線を引いてみた。 その線は素描同様素早く引かないと　張りを失い死んでしまう、自立する強度とイメージするフォルムを共存させる為の駆け引きは緊張を伴い、その素材抵抗は　私に充実感そして制作の喜びを満たしてくれる。

I quickly draw lines on a piece of paper with a pencil or pen...the lines I draw easily and comfortably unfold as a sketch of the work I imagine, accompanied by the shape of the human body. My lines become space on the paper, and their subtle movements unfold with a pleasant volume. I enjoy sketching and drawing.When making sculptures, I often work directly with clay or plaster...but is it possible to draw lines in real space, like a sketch, to create a three-dimensional object? This dream has repeatedly haunted me...this time, I departed from my familiar techniques and drew lines in space. The lines need to be drawn quickly, just like a sketch, or they will lose their tension and die. The game of balancing the strength to stand on their own with the form I imagine is tense, and the resistance of the material gives me a sense of fulfillment and the joy of creating.

中谷聡

原石の中央を、穴を続けて明けて、四角くくり抜いて、外に取り出してみました。数と、取り出された一回り小さな四角い石は、側面に無数の彫り跡をまとって、全く新しい立体となって出現してきたのです。さらに、残された元の原石も、内側に同じ無数の堀跡を残して、虚の空間を内包した全く新しい立体に姿を変えていたのです。この不思議な感覚と体験は、内とは何か、外とは何かを問う新しい立体空間の誕生のように想うのです。